

フレンズクラブ活動報告

一、甲南大学思春期発達支援事業の始まり

甲南大学思春期発達支援事業（フレンズクラブ）を開始した二〇〇五年当時、発達にアンバランスを抱える子供たちの幼少期での支援は整えられつつあり、幼少期の子供をもつ保護者は、ニーズに近い援助を得られるようになってきていた。しかし、思春期の子どもへの支援についてはまだ需要と供給のバランスが悪かった。

発達にアンバランスを持つ子供たちは対人関係のスキルを培うことは遅れがちであるが、思春期になると年齢相応に友達への興味が芽生えてくる。しかし、気持ちと裏腹の表現、仲間内だけで通用する符丁や暗黙の了解の上で成り立つぞんざいさ、など、この時期特有の人間関係は、彼らの未熟なスキルで乗り切れることは難しい。

彼らの対人関係スキルの未熟さを補いつつ、仲間を得たいという内発的欲求を満たす経験を提供する場を用意したいとの思いから、思春期発達支援事業（フレンズクラブ）はスタートし

た。

スタートから丸八年が経過し、二〇一二年の秋で九年目に入った。地道な活動の結果の積み重ねから成果が見えてきたところであるが、諸般の事情から、今年度をもって終了することになった。以下、今年度の活動を中心に報告していく。

二、方 法

対象…小学校五年生から中学校三年生までの発達障害をもっている子どもとその保護者。

形態…大学の前期・後期で各一期ずつ。一期につき十回の親子別グループワークと、フォローアップのための親子別の個別面接一回。その他に初参加時にはインテークのための親子別の個別面接を実施している。子どもグループでは、子ども一人にサポーターと呼ばれるスタッフが一人付き添い、サポーターとは別のスタッフがグループリーダーとして、プログラムを進行している。保護者グループにはスタッフ一〜二名がファシリテーターとして加わって活動している。対象年齢内であれば、複数期にわたる参加も受け入れている。

料金…一回五〇〇円

三、今年度の活動

① 第一五期（五月～七月）

参加者四組。内訳は中学校一年生一組（男子）、二年生二組（男子、女子）、三年生一組（男子）で、全組前年度からの継続参加であった。スタッフは博士後期課程の院生一名、修士二年の学生四名、修士一年の学生三名、大学院修士生一名だった。

すでに知っている者同士ということもあり、順調に滑り出した。特に男子同士は、学校では経験しづらい親密な友達関係を経験しているようだった。参加当初は、グループに入ることすら拒否した子どもも、打ち解けるようになり、子ども達はお互い個性を受け入れて、つきあうことができるようになってきた。

② 第一六期

参加者三組。内訳は中学校一年生一組（男子）、二年生一組（男子）、三年生一組（男子）で、全組前期からの継続参加であった。スタッフは博士後期課程の院生一名、修士一年の学生二名、学部四年生一名、大学院修士生二名だった。

男子ばかりの少人数だったせいもあり仲間意識がより深まったようだった。あとから来るメンバーの到着を心待ちにした発言や、子ども同士で気軽なやりとりをする場面が見られた。ま

た、他者との交流に消極的だった子どものかたくなさがほぐれ、自分からスタッフに声をかけるようになった。

四、研 修

毎年外部から講師を招いてスタッフを主な対象として研修を行っている。今年度はスタッフ中心の少人数を対象に、えじそんくらぶ奈良『ポップコーン』代表の楠本伸枝氏において頂き、発達のアンバランスを持つ子どもを育ててきた方の経験を聞く予定である。

五、ま と め

仮説―実践―仮説の立て直し、と手探りで実施してきた活動であるが、回数を重ねる中で、一人一人の子どもを的確にアセスメントし、適切に介入する方法論が先輩スタッフから後輩スタッフへと受け継がれ、つたないなりに洗練されてきたと感じている。参加者は「空気が読めない」と言われることの多い子どもたちだが、不思議なことに、彼らはスタッフの懸念を感じ取り、それに応えようとしてくれる。

この活動には八年間で延べ二〇組の参加があった。参加者の多くはフレンズクラブを大切な場と感じ、二期三期と続けるこ

とが多い。

衝動性が高く、スタッフが振り回されればなされた子どもや学校では十分良さを発揮できなかった子どもたちが、少しずつ、また、ある時急速に変化し、本来の特性は保持しつつも固有のやり方で人と関係をつなぐようになっていった。

保護者グループでは、一貫して愛着と甘えに着目して親子関係を肯定的なものにすることを主眼に活動してきた。子どもの特性から来るちよつとした勘違いや、母親をいらいらさせる言動の共通性に、共感しあい、一緒に笑い、相互サポートできる場として機能してきた。保護者グループ、子どもグループの活動が相乗効果を生み、双方の変化を加速させたと感じている。

第一六期の修了生には中学校一年生と二年生が一人ずつ含まれている。今後は希望がある限り、年間回数、一回あたりの料金をこれまでと同条件で、心理臨床カウンセリングルームでフォローアップを行っていく予定である。

(南野 美穂)